

(なお、今年は大阪府大 堺 風車の会が7,946メートルで1位で、東大飛行理論実践委員会 F-tec が1,308メートルで2位、日大チームは95メートルとのことでした。

(成績表と我がチーム)

傷心の状態で機体を撤収し、帰途につき、茫然自失の夏が過ぎ、再び来年の『夢』を見始めました。

来年こそはもっと風を掴み、もっともっと遠くへ飛ばそうと！！

飛行機は発泡スチロール(翼のリブ、プロペラ)、スチレンペーパー、パルサ材、PET フィルムと C-FRP。駆動系は自転車のペダルやチェーン利用。変速機。エポキシ系接着剤をメインにして組み立てました。制作費は1号機が約45万円、2号機は160万円程でしょうか。まだ会計報告は聞いておりませんが C-FRP に100万円以上かかったようです。C-FRP が安く手に入ることが出来るルートがあれば教えてください。

どうも、くどくどした『悪夢』の話をお聞き頂き有難うございました。

9月11日、東海地方は記録的豪雨に浸りました。全国に散るワングルOBの中にもこの災禍に遭遇された方達があります。すぐメールで知らせていただいた11期森川さん、17期渡辺さん。そして、克明な原稿でお返事いただいた37期柴田さん。

公の報道では抜けてしまうような混乱模様をお読みとり下さい。また、そんな緊急時、ワングルのお父さん、お母さんがいかに頼もしいものか！自負を持たれるとともに、それにかこつけて着々とワングル装備をゲットされることをお勧めします。

尚、柴田さんには多数の現場写真を同封していただきました。見慣れた風景が浸水していく驚愕が、見たこともない景色の方にはそのニュース性が伝わりにくいであろうという当方の判断により、一部の紹介とさせていただきます。お詫び申し上げますとともに、地域の皆様を含め、一日も早い復興をお祈り致します。

37期 柴田 祐介

9月11日、仕事が終わって地下鉄名古屋駅の改札を出るまでは、街の様子は日頃の雨の日と変わったところはなかった。名駅の地下街に異常に人が多いので「名鉄・JRが止まった？」と感じ、確認のため両改札口に近づこうとしたが、すでに人だかりで確認するまでもない。周りでは携帯で連絡をとろうとする人、公衆電話に並ぶ人、タクシーの列に並ぶ人、階段に座り込む人、改札の駅員の兄ちゃんに復旧のめどを聞く人など。

数年に1度ぐらいは台風等で電車が不通になることもあるので、今回の雨も「そういう規模の雨なんだ」と感じたが、帰る手段に心配はなかった。自宅は名古屋駅から約3キロ、歩いて45分、西枇杷島町である。

2・3年程前に台風の影響で電車が不通になったときは、自宅はすでに停電していたが、今日はまだ送電されているので、「たいしたことないのかな？」と思っていた。テレビでは知多の竜巻、電車の不通、地下鉄の駅が水没など。さしあたり、現在の自分に直接影響のない話題がニュースになっている。22時頃、歩いて30秒の庄内川の堤防(比高約3メートル)に上がる。堤防上は遠くのほうに消防団の車と付近の人が何人か見えるだけ、庄内川の水位は堤防の上まであと2メートルぐらいで、流れはかなり速い。ニュースでまだ雨が降りつづけるといっているのが気掛かりだが、庄内川の水位も自分で確認したし、明日も平日なので12時前にはフトンにもぐりこむ。

9月12日、午前1時頃、夢の中で「西枇杷島町に避難勧告が出ました」というアナウンスを聞いた。目覚めると、家族も起きてきた。外に出ると近所の人も出てきており、今後どうしようかと相談している。というのも、西枇杷の避難場所は全て自宅のある道路面(県

道 126 秩父西枇杷島線・旧街道の美濃路・通称を本通り）より低い土地にあるからである。自宅にもどり、一応避難用にザックに山道具を詰め込み、お風呂に水を張って（200 リットル確保）、ポリタンなんかにも水を入れるが避難はせずに 2 階で寝た。この時点で新川のことは、話題にも上らなかったし、そもそも全く考えていなかった。まだ、庄内川下流の下之一色町（中川区）の方が気になった。

12 日朝 6 時頃、電話で母が起こされる。母方の祖父母がテレビで「西枇杷がすごい事になっている」と心配して懸けてきたらしい。が深夜の内に停電したのか時計もテレビもつかないウナギの寝床では朝日も差さず、まだ暗いので「今、何時？何の用」という感じ。電話によると「西枇杷の町が水浸した」との事だが、自宅は停電している以外は別に変わったところ無しで、状況がつかめない。

雨はほとんど止んだ状態で、ときどきパラパラと降ってくる程度。T シャツ、半ズボン、サンダルに傘という格好で、自宅を出るが本通りは、近所の人は何人も出ているのが普段と異なるが、通りそのものは普通の雨の日と変わりなし。近所の人と挨拶がてら状況を確認しあうが確実な情報は誰も掴めていないようだ。しかし、本通りの人はほとんど避難しなかったみたいだ。まず、庄内川の堤防に上がると、堤防まで 1 メートルぐらいのところまで水がきている。（写真 1）こちら辺、いつもは公園と畑からなる河川敷なのだが、その痕跡も見えない。庄内川がこんなに広い川だとは。話によると深夜の 3 時ごろは堤防から



写真 1

庄内川はこの地点より約 800 メートル上流の県道 67（旧国道 22）の枇杷島橋の長さが約 150 メートル。写真付近は両側に河川敷が広がり約 500 メートルの幅がある。通常の水位から 7 メートル以上高く満々と水がある。写真中央の 13.8 の標識は河口からの距離（km）。対岸の中央のビルは J R 名古屋駅のツインタワー。

手が洗えるぐらいの所まで来ていたとの事。これが溢れなくて良かったと思った。堤防から本通りに戻り、名鉄本線の二ツ杵駅の方へ坂を下る（本通りから比高約 3 メートル下）。坂を下り着たところで濁流が名鉄線の方から音もなく急速に広がってくるのに出くわし、はじめて西枇杷の町が冠水している事が分かった。（写真 2～4）この途中、「新川から水が出たらしい」と言う話を聞き、「じゃあ、新川町はもっと大変だなー」と漠然と思っていた。この頃から、マスコミのヘリが飛んでいることに気が回った。濁水が坂を上がってきそうな雰囲気なので、いったん自宅に戻り今日は仕事に行けない旨を電話し、本通りより二ツ杵駅側に約 1.5 メートル下がった裏庭にある物置小屋の中からめぼしい物を母屋に上げたり、母屋の 1 階にあるものを 2 階に上げたりした。

自宅はまだ停電、水道は問題なし、電話は N T T の黒電話は問題なし、NEC の FAX 付電話は使用不可、ガスはガス圧がおかしいのか？すごい音と勢いで出るが使えないことはない、遅い朝食はそれで調理した。この頃から、父・祖父の知人から電話が引切り無しにかかってきて、全国に西枇杷の名と惨状？が伝わっていることを知るが、当事者であ



写真 2

自宅の東の名鉄二ツ杵駅への坂を下ったところ。中央の平屋の建物は二ツ杵郵便局。この奥に名鉄本線および二ツ杵駅がある。左手奥のビルは駅ビル。中央奥の看板のあるビルは三菱重工の社宅。社宅左手には三菱重工エアコン事業部の工場がある。この時点で、水深は足首から脛ぐらい。



写真 3

自宅の西方の坂。道の突き当たりは、二ツ杵神明社。その裏に名鉄本線が走っている。



写真 4

写真 1 の交差点を右（東）に行った所。電柱上部にあるように福祉センター（自宅周辺の避難指定場所）が画面左手にある。この道を（北に）直進すると J R 枇杷島駅がある。

る自分たちがどういう状況にあるか良く分からない。携帯ラジオで情報を収集しようとするがマスコミのヘリが何機も低空を旋回しており、その騒音でよく聞こえない。本通りでも朝 9 時ごろまで電気が通っていた所があり、その町内の人から新川の左岸（西枇杷側）の堤防が切れたことを教えてもらい、「新川町の心配なんかしている場合でない。西枇杷の大半が水没する（実際にはこの時点で既に水没していた）」と感じた。「しかし、新川みたいな人工の直線河道でなぜ片側だけ切れる?」。裏庭に濁水が入ってきて、物置小屋も浸水する。その後も水位の上昇は容赦がなく、これはちょっとマズイナーと。しかし、見ているより他にしょうがない。午後になると本通りまであと 1 メートルぐらいと言うところで水位が安定し、雨がこれ以上降らなければ、どうやら自宅の浸水は免れそうだと感じた。（写真 5 ～ 8）この時点で庄内川の水位はかなり引いており、朝には 1 台もなかった車（水没した地域から避難してきた）が堤防にあふれていた。本通りでは自衛隊や行政の活動を見なかったが、個人ボートで救出に向かう光景がそこかしこで見られた。日のあるうちに晩飯を作った。報道でガスは使うなどの事だったらしいが、本通りの人は結構使っていたらしい。家は用心のため、この日は E P I を使用した。

13 日、堤防の復旧と排水作業が始まったらしいことは分かったが、1 日で水が引くとは思わず（水が引かないと何も出来ない）、バイクで仕事に行く（名鉄もまだ水中）。庄内川を渡り名古屋市に入ると、すっかり平常通り。仕事場で携帯を充電する。夜、市内のネオンとは対照的に、枇杷島橋を渡ると逆に真っ暗。自宅前の通りが普段ではありえない渋滞になる。橋で車両の流入規制としないのか?。本通りの人たちが福祉センター（避難所の一つ）のために炊き出しを行ったらしい。14 日、深夜に自宅周辺の電気が復旧し、朝には名鉄も平常運転していたので、電車に乗って仕事に行く。15 日からの連休は掃除・ゴミ出しなど。

幸いにも我が家は母屋への被害が無かったが、床上浸水した家屋では、まだ、床を張っていないところもあるし、明かりの無くなった家もある。



写真 5
写真 3 の数時間後。坂の上から。

写真 9
9 月 19 日撮影。写真 3 の坂。
これでもゴミは減った方。
町は悪臭とクレゾール（消毒薬）
のにおいと砂埃がひどい。



なお、白黒複製印刷となるため、現地の状況を想像していただくためにと考え、一部の写真については、カラープロッターによる出力プリントを準備し、事務局長様のお手を煩わせて挟み込んでいただきました。

(現地及びフィルム上の豊かな色彩は、余りうまく再現されたとはいえませんが。)

また、期限までに全員の皆さんのプリントが準備できるか、やや心もとなく、入っていない場合は小生の責任です。

あのまちこのまち <105>

白山麓 出作りの村の記憶 —石川県白峰村ほか—

ながおか まさとし
長岡 正利

はじめに—白山麓のあけぼの

石川県・富山県・岐阜県・福井県にまたがる白山山系(両白山地)の西側山間部一帯に、古くから「出作り」と呼ばれる伝統的な生活文化があった。出作りは、地理・民俗・歴史学の立場から研究の対象とされてきたが、高度経済成長期を経て今ではほぼ消滅し、往時の写真と文献の中に、あるいは一部家屋が「白山ろく民俗資料館」に移築されて、当時の姿をとどめているに過ぎない。

それが、ここに紹介する白峰村を中心とする地である。

白山山麓の村々の成立はかなり古い。このあたりの一帯は、平安時代には加賀国司の支配下に置

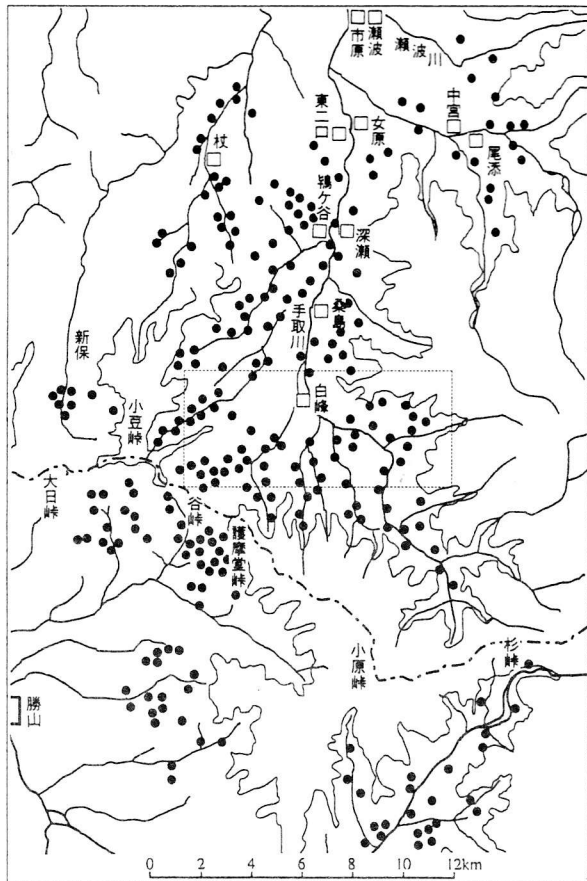
かれた。その後、加賀の守護富樫氏の所領となり、一向一揆などを経て、寛文8年(1673)には幕府直轄の天領白山麓拾八カ村(現在の白峰村、尾口村、鳥越村、小松市山間部にまたがる)となって、加賀百万石の威光も及ばぬ別世界であった。

さかのばれば、この地は、越前の僧泰澄による養老元年(717)の開山伝承のある白山信仰の中心地として、平安時代中期以降から江戸時代まで、越前・加賀・美濃の3馬場からの山頂登拝の経由地として知られ、賑わった。白山信仰は、現在も人々の間に生き続ける御嶽講(木曾御嶽山)のような形とはならなかったものの、その面影は全国に散在する白山神社として今に残っている。

出作りの村々

「出作り」とは、無雪期に山中の家(季節出作り;次ページ左下写真)に移り住んで、農耕、養蚕、炭焼きなどに従事し、冬季に本村(母村)に戻る生活形態をいう。一年を通じて山中で生活する「永住出作り」(上記以外の写真の地)もあったが、冬の積雪による交通途絶を嫌って、昭和40年代には無雪期のみのものとなった。

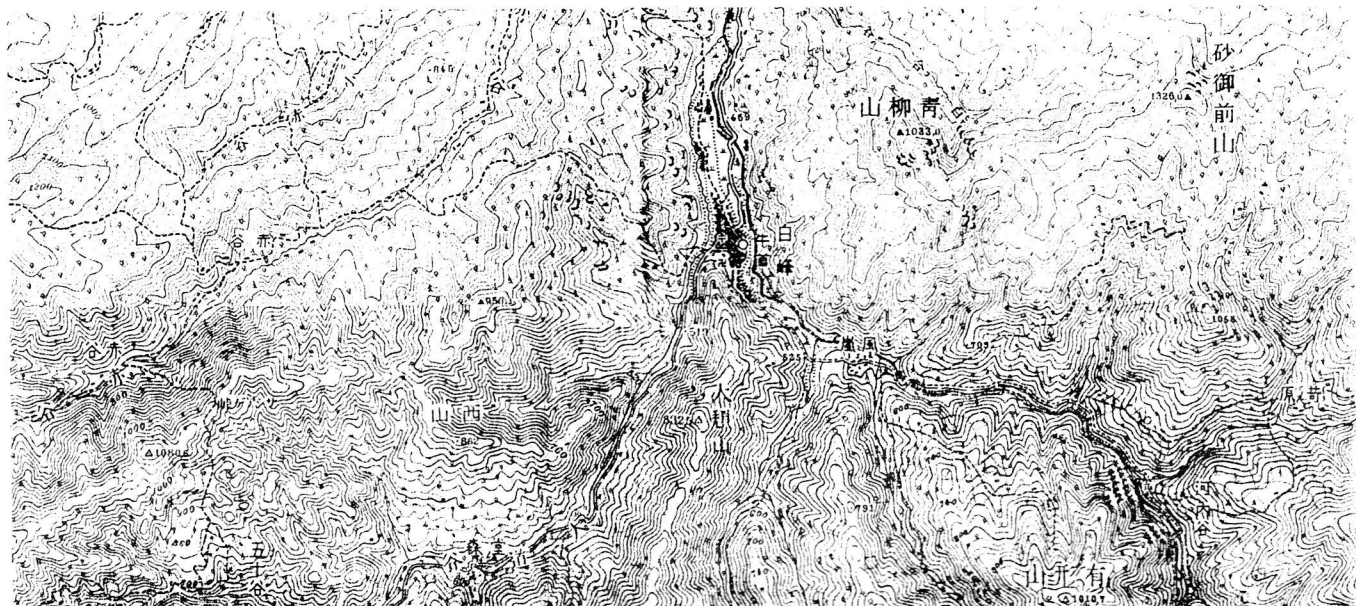
この出作りの発祥については、本村での人口増加に伴う耕地不足を補ったものという戦前からの説と、もともと古くから周辺の山間斜面には散在する定住地があって、これが生活の利便性を求め



明治43年の地形図から見た出作り分布(山口(1994)より、その一部: 原図は、田中・幸田、(1933)・地理評3巻)。□は、次ページ地形図の範囲。



表紙と同じ地点、白峰村大杉谷の初冬の眺め
家は次ページ写真の長坂宅。



明治43年測図の5万分1地形図に見る白峰周辺。図中の山間部に散在する黒点(黒抹家屋)が出作りの家々(「白峰」「經ヶ嶽」の一部、×0.8)

て次第に本村に生活の本拠を移すようになったものの、春になれば山での仕事に戻り、やがては本村の人口増加によってさらに遠隔の山中への出作りが促進されたものという、2つの説がある。

歴史に見るその起源は古い。江戸時代の所領争い(山論)ほかの文書によれば、室町時代には既に出作りが行われていたものようである。また、江戸時代には、牛首(現在の白峰村中心地の白峰)村民は広く近隣の勝山藩、郡上藩、加賀藩領の山間部に出作りに出ていることが知られている。

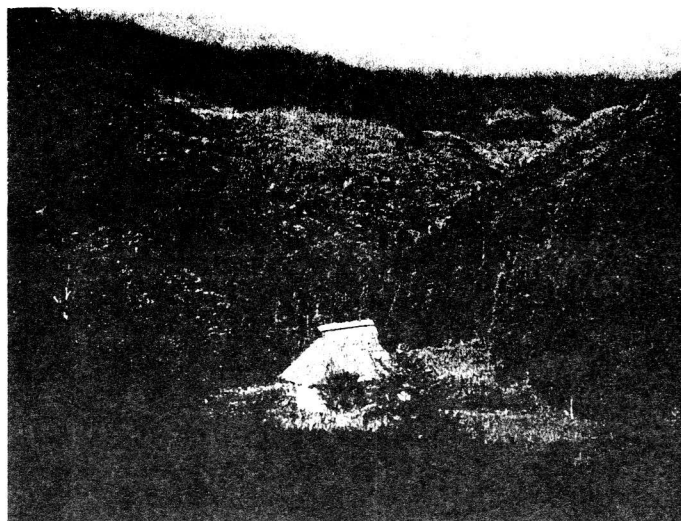
幕末期の文久3年(1863)には、牛首の家数は480軒で、うち100軒が村方に居住、200軒が夏期不在の季節出作り、180軒は奥山に永住出作りで、形式的に村方の人別。なお、季節出作りの人々は、積雪期には、越前・加賀の平野部やさらに遠国に出稼ぎなどに出かけていたという。

くだって、明治末期から昭和初期の調査においても、ほぼ同規模の出作りを数えている。

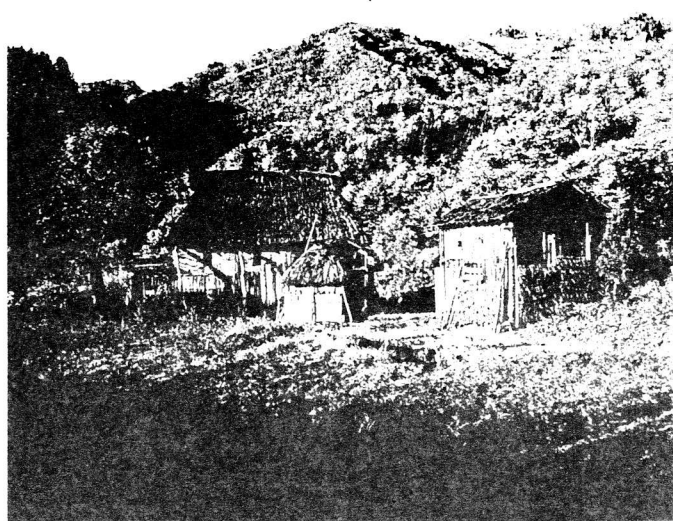
山中での生活は苦しいものであった。山深い傾斜地で雑畑を開いての耕作—斜面の樹木を伐開して畑を開き、これに火入れをしてヒエ・アワなどを植える。その地で5年ほど順次作物を変えて輪作し、その後の20~30年は自然に戻す。このような土地をムツシと呼んだ。本ページの写真のように、家の近くでの常畑や水田稲作が可能であったのは僅かな平坦地においてのみであった。ほかに養蚕があったが、これは全国での傾向と同様に、戦前が最盛期で昭和40年代には消滅した。

戦後もしばらくすると、山間部では、雑穀の作付けよりは杉苗生産や炭焼きが現金収入の面で有利となり、やがては電源開発や砂防工事、林業や製材業が盛んとなって、村の生活構造は一変した。
出作り地の終焉と現在

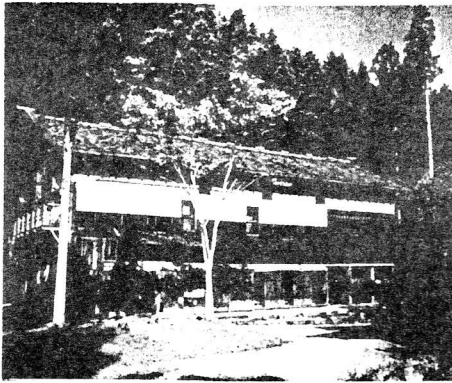
しかし、炭焼きや林業の盛況は長くは続かなかった。その後の高度経済成長と、いわゆる燃料革命(薪炭から灯油・ガスへ)が山間部の経済にも



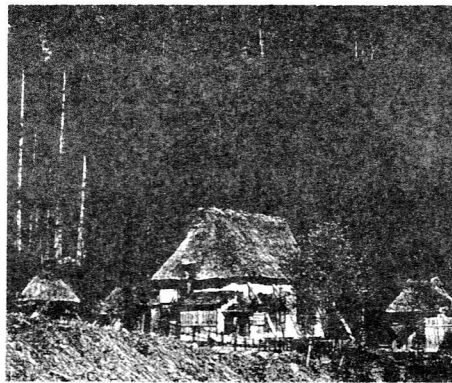
白峰村河内谷の季節出作り 山麓に伝わる「神迎踊り」の一節、「河内の奥は朝寒いとこじゃ、…、御前の風を吹き降ろす…」を思い起こすような冷夏の年の風景。家の周りにはアワなどの畑。



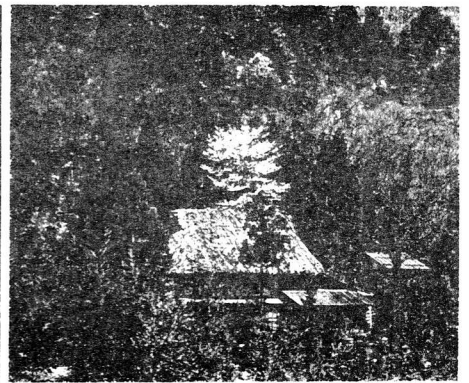
白峰村大杉谷苛原にあった長坂宅 冬に備えての薪が積まれた納屋(右)、ほか幾棟かの建物からなる規模の大きな永住出作りで、村内にあった一般民家とかわらない。



「白山ろく民俗資料館」に移築された白峰本村の家 豪雪と養蚕を反映した立派な造りの民家



同、移築された出作りの家 前ページの長坂宅で、周辺の建物と一体的に保存



現地に現存するほぼ最後の出作りの家 白峰村大空の織田宅。春5月山桜の眺め

大きな影響をもたらした。炭焼きはすたれ、それに追い打ちをかけるようにして、木材輸入自由化以降には林業は凋落の一途をたどった。

一方では、公共土木工事などによって現金収入の途が広がったことに加えて、若い人々を中心に都市部への人口流失が続いていた。そのため、自然の生態系と調和しつつ自給作物と商品作物を生産するこの出作りは、とうに成り立たないものとなり、出作りはついえた。

現在、その一部家屋は「白山ろく民俗資料館」に移築・保存されている。新旧の出作りの家々だけではなく、養蚕が盛んで豪雪の地であったことから、3階建ての剛健な造りの家も見られる。また、同館には、暮らしのほとんどもを自給自足でまかなっていた時代の貴重な資料を多数展示して、雪深い山村特有の暮らしぶりを今に伝えている。

ほかに、白峰村には、著名な恐竜化石産地であることから「白山恐竜パーク白峰」館、山の恵みによる素朴ながらも味わい深い食べ物の数々。また、白山国立公園への玄関口としての、あるいは冬のスキー場など、四季折々のにぎわいがある。

わが国の高度経済成長がようやくに翳りを見せようとしていた頃、昭和50年代に入って、白山麓の山間部広くに散在していた出作りの家々は一斉に姿を消し始めた。それは、当時の全国各地で見られたように、開発の手が及んだがためのものではなく、もはや、辺鄙な山間部には一時的にせよ、住む人々の居なくなったためにほかならない。その後僅かの間に、今となっては個々の家がいつの冬に潰えたのかの記憶も定かではないが、守る人のない家々は、年ごとの豪雪に耐えかねるように、何時とはなく自然のなかに埋もれ、水田のあるものは水芭蕉の茂る湿地に、あるいは杉の植林地にと姿を変えて行った。

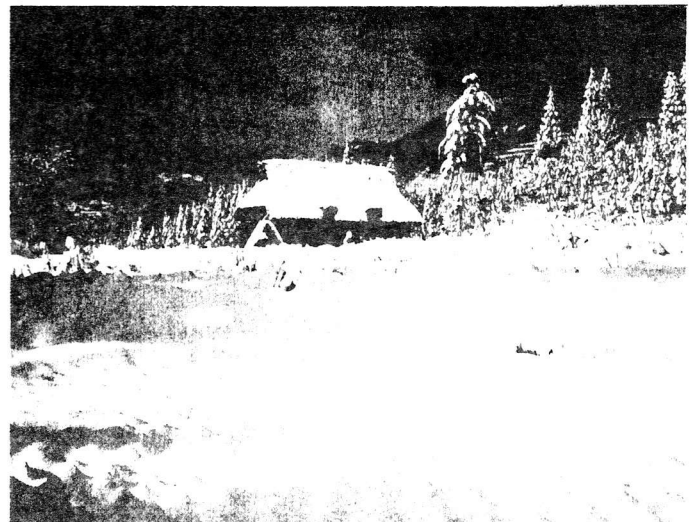
白山麓の暖かな山懐の秋に往き逢うたびに、往時の人々との語らいを、もう随分昔のことにもかかわらず、わずか一ときが過ぎただけのように想い、懐かしむ。

主な文献、ご参考のために

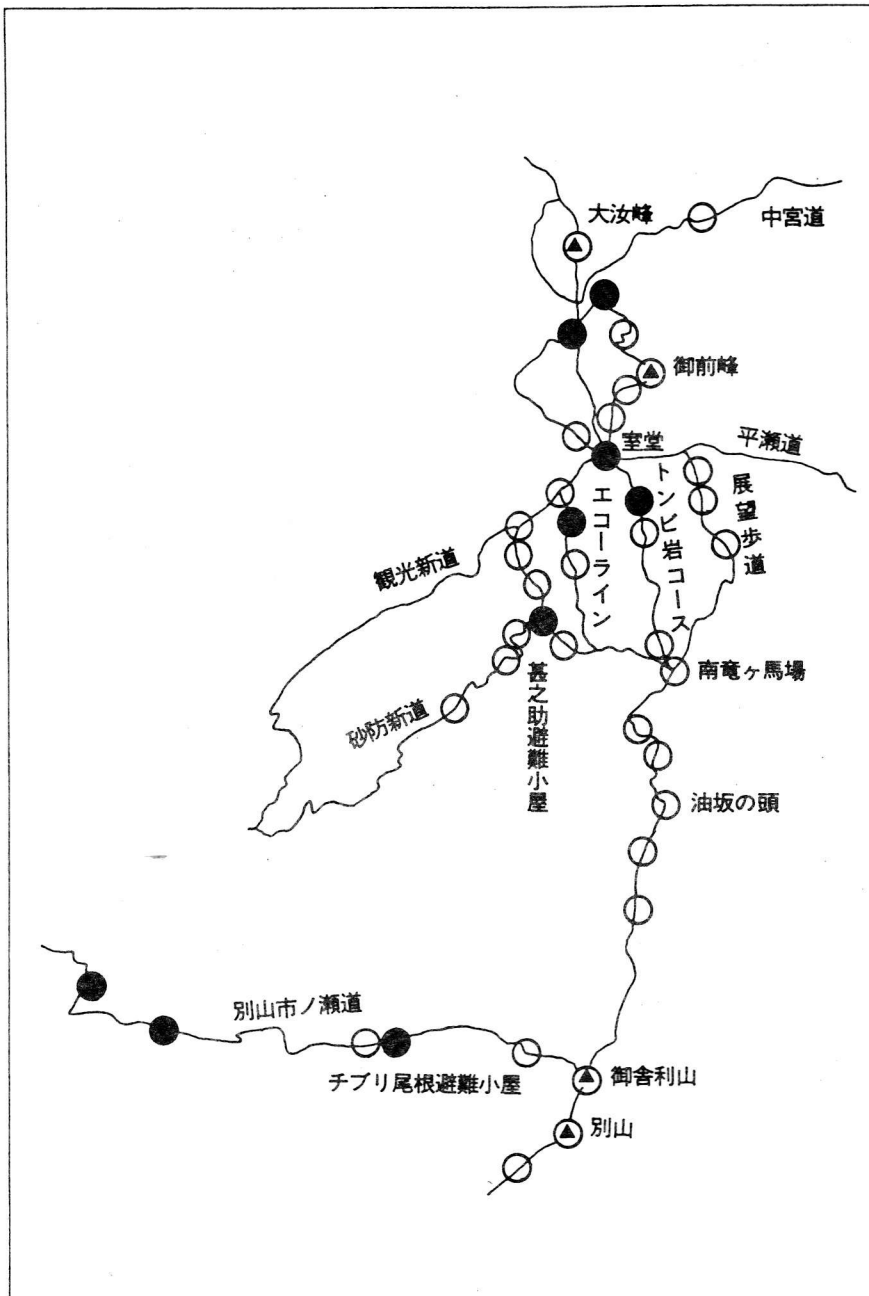
若林喜三郎編『白峰村史、上・下巻』白峰村役場（1962・1959）
北國新聞白山総合学術調査団編『白山』北國新聞社（1962）
白山総合学術書編集委編『白山—自然と文化』北國新聞社（1992）
山口隆治『白山麓・出作りの記録—牛首村民の行方』桂書房（1994）
橋札吉『白山麓の焼畑農耕』白水社（1995）
白峰村のホームページ：<http://www.vill.shiramine.ishikawa.jp/>



白峰村五十谷にて 紅葉は10月中旬から11月上旬にかけて全山を彩り、たちまちに過ぎてゆく。望見する山肌各所に、このような家々が点在するのどかな眺めであった。



11月下旬には積雪を見る まだ季節出作りの続いていた頃で、手前は稲刈り後の水田の新雪。今、この地では、何代にも亘って仰ぎ見られてきた標ばかりのトド松を残すばかりの風光。家も田も消え果てた。



白山山頂部におけるオコジヨの目撃記録 (●は繁殖に関する記録)

で子供一頭が、また同じく一五〇〇坪で子供三頭が発見されています。

今までの調査で、白山山系では北は金沢市の高三郎山から、南は岐阜県の大日ヶ岳までの広い範囲で見つかっています。図には最近の調査で明らかとなった場所を示してあります。黒丸で印したのは子供が見つかり、近くで繁殖したことが考えられる記録です。

冬に低地で見つかる

白毛のオコジヨが、白峰村の標高約七〇〇坪で一月に、尾口村の標高約六〇〇坪で十二月、一月、三月に、鶴来町の標高約四〇〇坪で二月などの発見記録があります。おそらく冬になると、低山に降りるものがあると考えられます。この中で尾口村の記録は、白山自然保護センターブナオ山観察

舎およびその付近で違う年に見つかっており、冬期の生息地となっているようです。

日本列島の分布の西限

ところで白山は、日本列島の中でオコジヨの分布の西の端にあたります。氷河時代が終わって、地球が暖かくなると、高山に逃げ延びたオコジヨだけが生き残ったと考えられるのです。白山より西方には、オコジヨが生き延びることが

できる高山はありません。白山のオコジヨは、現在の分布の中心である日本アルプスからは遠く離れ、孤立した存在です。高山植物やイワヒバリなどと同様に将来が危ぶまれる生き物の一つなのです。

夏に白山へ登ったとき、避難小屋や室堂、お池めぐりコースなどで、ひと休みしているときに周りを注意して探してみてください。小さくて愛嬌のあるオコジヨに、運が良ければ出合えることと思います。

白山のオコジョ

上馬康生

石川県白山自然保護センター

愛らしい姿で登山者を魅了するオコジョ。白山山系のオコジョも、高山植物などと同様に、その将来が危ぶまれています。

いらしい動物ですが、主にネズミ類を餌とし、他に鳥の卵や昆虫も食べ、時にはノウサギを襲うというどう猛さも持っています。

子どもの成長

オコジョの研究者である野紫木洋さんの報告では、子育ては雌のみで行い、出産は四月下旬から五月上旬頃ということ。白山ではまだ深い雪に覆われているころです。そして、約七週間で初めて巣の外に出て、二か月半で母親に連れられて出てくるようになります。このあと秋まで子は母親と一緒に生活し、十月下旬頃には独立するようです。

白山での分布

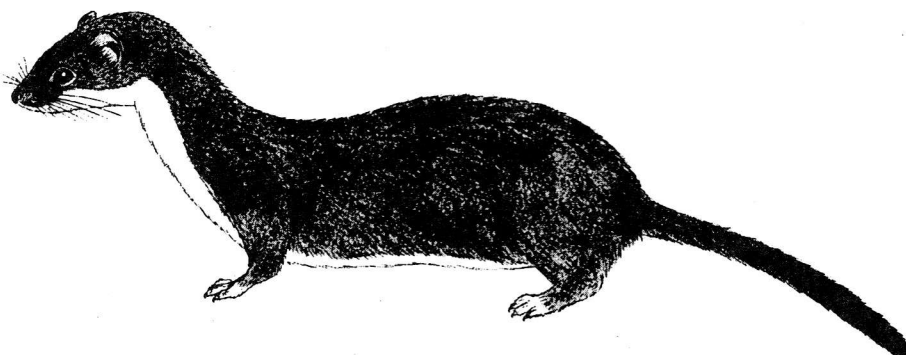
夏の白山では、登山シーズンの七月～八月に、標高二〇〇〇以上の亜高山帯から高山帯で観察されることが一般的です。この時期は、前記のように子供が巣場所から出てきて動き回るころなので、好奇心旺盛

な子供が人の近くに来て発見されるのではないかと思います。また高山帯では岩場があったり、背の低い草木しか生えておらず、見つかりやすいからかもしれません。最近の調査で、高山帯だけでなく、より低いブナ帯からの記録が見つかり、しかも繁殖していることも分かりました。例えば別山チブ利尾根のブナ林の標高一三二〇

オコジョに始めて出会ったのは、もう三十年近く前のことです。白山の四塚山の山頂近くで、山の仲間四人でいつしよの時でした。休憩していたところ、すぐ近くの茂みから、ひょっこり出てきたのです。静かに動かずにしていると、私たちを見上げ、引き返して姿を隠し、またすぐに姿を現すという行動を何度か繰り返しました。一度は、私の登山靴に前足を掛け、不思議そうに見上げては、驚いたかのように姿を隠したりして、とても愛嬌のある仕草でした。その後、白山のいろいろな場所で何度が出合ってきました。

オコジョの特徴

オコジョはイタチの仲間の小型の哺乳類です。夏毛の背は濃い褐色、腹は白色で、冬期にはほぼ全身白色になりますが、尾の先の三分の一は一年中黒色です。雄の方が雌より少し大きく、頭と胴体の長さは十五～二十センチのほっそりした体つきで、五センチくらいの尾がついています。一見かわ



オコジョ (イラスト/加藤友美)